

『一隅を照らす』

中学校の卒業式に出席させていただきました。しんと静まり返った式場で真剣な表情で式の開始を待つ生徒たちの様子から「卒業式という儀式を大切にしよう」という気構えが感じ取られました。また、起立や着席、礼の仕方がピシッと揃っていたこと、式場全体に響き渡るしっかりとした歌声など、生徒たちの式に臨む素晴らしい態度に感銘を受けました。

教育委員さんからの来賓祝辞で「卒業生の皆さんは、これまで義務教育というレールの上に乗って来たが、これからは、自分で将来の道を選択しなくてはならない……。」
「誰にでも1日24時間という時間は平等に与えられている。この時間をどう過ごすか、1週間、1か月という短い期間では、それぞれの変わり方に差はないが、10年後ともなれば、時間を有効に使った者とそうでない者との間には、とても大きな違いが出る……。」という内容のお話がありました。卒業する喜びを持つと同時に、これからの新たな生活に不安をぬぐいきれない卒業生にとって、ずしんと心に響くお話となったのではないかと考えさせられました。

15歳から10年後といえば25歳、その10年間というのは、人の一生の中では極めて大きな変化をしいられる期間であります。また、気持ちの持ち方次第で自立した一人の人間として素晴らしい成長を遂げることができる期間でもあります。

人に頼りきり自己決定をすることもなく、思うようにいかないのはすべて人のせいという気持ちのあり方で過ごす10年と少しずつでも自立した生活を心がけようとした10年間とでは人間性に大きな違いが出ることは明らかです。こうなりたい、こうすべきだなど常に何かを目指すこと、つまり夢や希望をえがきながら日々与えられた時間を大切に過ごすことがとても大事と言えます。また、地道な積み重ねから人間としての強さが生まれます。この強さというのは人と比べることではなく、向上心とか自制心などを働かせる力、価値の高いものを目指そうとする力、冷静に判断できる力などを持ち備えることが真の強さではないかと考えます。

親や先生方が子どもたちによく言う、「立派な大人になりなさい。」というのは、地位や名誉、高収入を得なさいということではなく、人に迷惑をかけずに社会に貢献できる人、いかなる困難もくじけずに乗り越えるための知恵と気力を身に付けた人となってほしいとの願いが込められていると思います。

中学校を卒業する生徒たちは、これからの人生において、いろいろな生き方を模索していくことだろうと思います。人の生き方の豊かさ多彩さが、人間の素晴らしさです。どのような人生、どのような生き方については、それぞれの人がしっかりと将来を見据え、慎重に自らが判断し、進むべき道を選択することが大切です。

私自身「自分もそうありたい」と日頃考えていることに、「一隅を照らす」という生き方があります。「一隅を照らす」という言葉は、伝教大師・最澄の『山家学^{さんげがくしやうしき}生式』という修行する学生たちのために書いた書物に載っています。最長はその中で、「国の宝とは何だろうか。大きな素晴らしい宝石がたくさんあるのが国の宝だろうか。いや、そうではない。一隅を照らす人、それこそが国の宝なのだ」と述べています。

大きな灯台となって「千里を照らす」人生、国や世界の動向に影響を及ぼすことのできる人物となることは素晴らしいことです。しかし、そのような存在には誰もがなれるわけではありません。それに、大きな明りというのは、大きな陰をもまたつくり出すものです。それに対し、一隅を照らすだけの小さな灯ならば、誰にでも掲げることができるでしょう。そして、その数が多くなればなるほど陰は少なくなります。それは大きな明りにもけっして劣ることはありません。たとえ小さくてもよい、自分の個性と能力に見合った明りを、「こここそ自分の持ち場だ」と信じる場所に掲げ、周りを少しでも明るくしていけたらと思うのです。